駒場友の会

会報第22号

ホームカミングデイとピアノ演奏会

駒場友の会は、毎年の東京大学ホームカミングデイに、本学を卒業して活躍されている音楽家をお招きする演奏会を開催しています。東大は、優れた演奏家を多数輩出しています。

今年は、本学を卒業後、ミュンヘン音楽演劇大学でピアノ演奏を学んでおられる世古隆蔵さんをドイツからお招きしました。十月十九日（土）に駒場コミュニケーションプラザ音楽実習室で開催。音楽実習室のスタインウェイ・フルコンサート・グランドピアノは二〇〇六年に設置されて以来、節目節目の演奏会で活用されています。

プログラムは、バッハの平均律クラヴィーア曲集（第二巻より第九番ホ長調）に始まり、モーツァルト（ピアノソナタ第八番イ短調）とベートーベン（ピアノソナタ第十三番変ホ長調「幻想風」）、ショパンの舟歌嬰ヘ長調と続きました。最後はシューマンの幻想曲ハ長調でした。

各時代の規範的な名曲ばかりで、この演奏会にかける世古さんの意気込みが伝わるものです。演奏は素晴らしく、抒情性・技巧・構成感のどの面でも申し分なく、奥行きが深く、聴衆を音楽の世界に引き込む力に溢れていました。

この演奏会については本紙後段の記事をご覧ください。

味覚のアトリエ@駒場

ユネスコの無形文化遺産に和食が登録されるなど、食への関心がいよいよ高まっています。駒場友の会が毎年開催している食のイベント「味覚のアトリエ」が今年も開催されました。十月二三日（水）、駒場ファカルティハウスにて。ティファールと東京ガスの協賛。定員は六〇名。

今年のテーマは「テロワール：風土が育む食」。テロワールはフランス語のterreにちなむ言葉で、土のみならず、土地、風土、人に育てられ、守られてきた固有な食材を指します。

まず、世界の食文化に詳しい大澤隆さんが講演をされました。食材の品質表示ではフランスが先進国で、一九三五年に「原産地統制呼称（Appellation d'Origine Contrôlée、略してAOC）」が始まりました。当時ボルドー地方で葡萄の害虫被害が広範囲に発生し、他所で作られた質の悪い偽ボルドー酒が市場に出回って信用をなくすという事件があり、ボルドーワインのブランド復活をかけた大掛かりな取組みとして始まったそうです。

今では、チーズ、バター、オリーブオイル、くるみ、ひよこ豆、鶏肉などにも広がり、フランスの食の質保証に貢献しています。

試食を楽しむ学生たち。メニューは、白い野菜のヴルーテとモンサンミッシェル産のムール貝の取り合わせ。青リンゴとアンディーブのサラダ添え。デザートとして、栗のミルフィーユ

会場に展示されたテロワールの食材。右端は丹波栗（銀寄）。中央はブレス鶏（フランス中東部）。左端は有名なモンサンミッシェル産のムール貝

続いて、駒場キャンパスの「ルヴェソン ヴェール」のオーナーシェフ伊藤文彰さんが登場。伊藤シェフは、この日のために丹波（兵庫県）の栗農家を訪ねて取材をし、銀寄（ぎんよせ）という希少な栗を準備してくれました。モンサンミッシェルから航空便で取り寄せた生のムール貝も皆の前で説明を交えて調理され、デザートには栗のミルフィーユが添えられました。

会場には、内外の様々なテロワールの実物やパネルが並び、イベント終了後も参加者が熱心に質問をしていました。「こんな本物を食べる機会なんてほとんどない」という学生の切実な声も聞かれました。

ニューヨーク近況

高須　幸雄

人間の安全保障プログラムの特任教授として駒場でお世話になった後、ニューヨークの国連本部で勤務を始めて早くも二年近く経とうとしている。外交官の現役時代を数えれば、今回が四回目のニューヨーク勤務で、勝手知った街なので生活の面でのテンポの速さに戸惑うことはないが、仕事の立ち位置が、日本政府を代表する国連大使の立場から国際社会を代表する国連の立場に変わって、物事を判断する視点を変えざるを得なくなっている。

私の国連事務局での仕事は、マネジメント（管理）担当の事務次長として、世界各地で展開する国連組織全体の予

算財務、職員人事、施設、調達、情報通信など全般を運営管理することである。国連行政問題に関して、一国の代表であれば、自国の立場を主張し、提案を行い、各国の理解、同意を得るために働きかけることで仕事は終わるが、事務局を代表する今は、バンキムン事務総長の代理として国連行財政、管理問題の説明責任を果たし、成果を出すことが求められる。

国連事務局の政治、開発、人権等の部局では、政策、指針に関する報告書を加盟国に提出することで主たる仕事は終わり、そのあとは国際情勢や加盟国間の交渉次第ということになるが、私の担当する管理分野はどの程度成果が出たのかが数字で判断されるので気を緩めることができない。

今年の優先課題は、国連発足以来六〇年間累積した複雑な行政手続きを標準化し、抜本的に改革すること（国連では、オモジャ計画と称される）、職員の定期異動化を導入すること、国連本部の全面改築を今年秋までに完成させることである。

国連は、主権を有する一九三カ国からなる加盟国の合意に基づいて運営される国際組織であるので、世界政府とはほど遠い。シリアや南スーダンなどで無辜の市民の生命、生活が脅かされるなかで、和平、人道危機に対して有効な手を打てない国連の現状に失望して、「国連は無力」と批判する向きも見られる。これは一部常任理事国の反対のために安保理の承認が得られず、強制力を伴う措置がとれないからであり、事務局の努力不足から来るものではない。

とはいえ、図式的に例えれば、国連総会や安保理がいわば立法府の役割を果たし、国連事務局はその合意を実施する行政府のような役割を果たすともいえよう。たとえば、安保理がシリアの化学兵器廃棄や南スーダンへのPKO要員の増員を決定すると、国連自体に自己財源や要員、機材がある訳ではないので、その活動に必要な予算、要員を確保し、機材を調達するのは管理局部門の仕事になる。事務局として予算を支出するためには、国連総会の承認を得る必要があるが、決定はコンセンサスとの慣行になっているので、いわば国会に与党がいない政府が議員による全会一致で予算を承認してもらうようなもので、予算獲得には想像以上の苦労を伴い、難航した交渉の結果承認されるのは年度末ぎりぎりとなることが多い。

国連の仕事が報道されることは、残念ながら日本では少なくなり、せいぜいシリア、南スーダンなどの紛争や北朝鮮やイランの核問題に限られるように見受けられるが、その背後で迅速な対応が出来るように常に準備をしている管理局の仕事にも思いをはせて頂ければ幸いである。

私の国連でのもう一つの仕事は、「人間の安全保障」担当の事務総長特別顧問として、世界の紛争地や開発の遅れた国で全ての人が、分け隔てなく命、生活、尊厳を享受できるようにとの思いでその考えを広める活動である。

記者団の質問に答える高須幸雄国連大使（2008年当時）。　写真提供：共同通信社

人間の安全保障については、その定義について明確でないとして、一部から異論が出ていたが、国連総会決議で共通理解についての合意ができて、現在はMDG（ミレニアム開発目標）、ポスト二〇一五年の開発アジェンダ、平和構築などに、全ての人の尊厳を重視する人間中心の考えが具体的に反映されるようになっているのは嬉しい限りである。

例年になく厳冬のニューヨークで人間の安全保障を議論するとき、三年過ぎても未だ仮設住宅で冬を過ごす多くの被災者、特に子ども、高齢者など被災弱者のことが頭から離れない。

全てのひとに生きる希望を与え、尊厳を守ることが出来て初めて、人間の安全保障をテーマに研究し、推進する意味があると痛感する。駒場を拠点としながら、いまも宮城県の被災地で「こども未来館」の支援活動を進める人間の安全保障フォーラムの仲間達に思いを致すこの頃である。

（国連事務次長、駒場友の会会員）

東大での経験を音楽の糧に

世古　隆蔵

去年の六月、ミュンヘン音楽大学を受験し、晴れて合格。駒場時代にお世話になったピアノ委員会の小川桂一郎先生にご報告したところ、お祝いの言葉とともに、ホームカミングデイ（十月十九日）演奏会に招きたいとのお申し出を受けました。それは大変嬉しいことでしたが、果たしてそのような大舞台が自分に務まるのかと戸惑う気持ちが交錯しました。

せっかくいただいたチャンスを実らせたいという思いからお引き受けし、合格に安堵する間もなく、慌ただしく準備を開始しました。好きなことができるのはありがたいことですが、これからは自分のためではなく、聴衆に、作曲家が音符に託した音楽を私の解釈を通して伝えなければなりません。準備をすすめるうちに、その両者への責任の重さをひしひしと感じました。これまでとは質の異なるプレッシャーに耐えながら必死に練習を重ね、十月に再び駒場を訪れました。

駒場キャンパスでは、毎年二回、本学学生の選抜コンサートが開かれています（教養学部ピアノ委員会主催、駒場友の会協賛）。私も学生時代にその演奏会に出演させていただきました。選抜コンサートは今回の演奏会と同じ駒場コミュニケーションプラザ北館二階の音楽実習室で行われています。演奏会の前日、リハーサルのためにそこ

に入った時、かつての思い出が蘇り、このホール、そして東大との不思議な縁を感じたのです。

その縁のおかげか、本番は緊張に押し潰されることなく、無事全曲を弾き終えることができました。つくづくと、音楽家としての責任感があるからこそ、全身全霊で聴衆に音楽を伝える喜びもひとしおなのだと実感しました。この経験を通して、これから音楽家として生きていきたいという気持ちがいよいよ強くなりました。

幼い頃から、好きという一心で続けてきたピアノ。小学校の頃は「自分は将来音大に入ってピアノの道に進むんだ！」と、当然の如く考えていましたが、年齢とともに自分の才能という厳しい現実に直面し、高校一年の終わりに一般大学に行くことに進路を変えました。

文科一類に在籍した最初の二年間は、駒場の自由な雰囲気の中でピアノの練習に明け暮れました。本郷に進学し、専門の勉強が進むにつれ、「このままピアノは趣味として終わってしまっていいのか？だが、音楽の世界で生計を立てていくことができるのか？」という疑問が日に日に増してきました。毎日自分に問いかけ、出口の見えない迷路をさまよい続け、どうして自分が東大にいるのかさえわからなくなり、登校すらままならなくなりました。一年留年してもその迷路から抜け出すことはできず、卒業後、新天地でやり直したいという思いからドイツに飛び立ちました。

ドイツの大学で少し音楽学も勉強したのですが、それも結局合わずじまい。考え直して、ドイツで音大を受験することを決意しました。それは一昨年の冬のことで、東大時代、自分の将来に疑問を感じ始めてから、四年近くが経過していました。それからは一心不乱にピアノと向かいあう日々。六月に合格の知らせを受けた時の喜びは格別で、今も忘れられません。

こうしたなかでお招きいただいた母校のホームカミングデイでの演奏は大きな転機となりました。辛いことが多く、学業に身も入らなかった東大時代の「自分」。否定しがちだったその過去を、今の「自分」との関連の中で、再び肯定的に見つめ直すきっかけをこの演奏会は与えてくれたのです。

音楽家としては随分遠回りをした私ですが、東大で得られた人生経験を音楽の糧とし、これからも音楽と共に人生を歩んでいきます。ありがとうございました。

（二〇一二年経済学部卒）

十周年を迎えた駒場友の会

小島　憲道

駒場キャンパスは、旧制第一高等学校時代から受け継がれてきたリベラルアーツ（教養教育）の精神と、東京帝国大学農学部時代以来の緑豊かな自然を誇りにしてきました。こうした恵まれた環境を愛し発展させるため、駒場キャンパスにゆかりのある幅広い人々の集いの場として駒場友の会は設立されました。

「仲間内のノスタルジーを満足させることに力点が置かれがちの同窓会ではなく、駒場の教育・研究・社会貢献が活力あるものとなるよう支援することに力点を置いたもの」。会の精神を、遠山敦子元文部科学大臣は会報第一号にこのように書いておられます。

十年前は丁度、国立大学が法人に改組された時であり、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部は教育研究面でも施設面でも大きな変革の時期にあり、東京大学がその社会的基盤を強化するためにも教養学部に同窓会を設置する必要がありました。

また二〇〇四年は第一高等学校の一三〇周年にあたり、一高同窓会の活動の終焉が迫っていたことから、その役割の継承も検討課題となりました。

この状況の下で、教養学部長を終えられた古田元夫先生が中心となって「駒場友の会準備委員会」が立ち上げられ、蓮實重彦元総長、三重野康元日銀総裁、石井紫郎元副学長、遠山先生など二〇六名の呼びかけ人のご尽力により、設立総会が同年三月二〇日に開催され、会長を本間長世先生、副会長を嘉治元郎先生と毛利秀雄先生（お三方とも元教養学部長）にお願いすることになりました。

キャンパス西側に長くあった一高同窓会館跡地に駒場ファカルティハウスが新築され、その一室に、駒場友の会と一高同窓会の事務室がおかれました。

会の創始期に重責を担われた本間先生と嘉治先生は他界されましたが、そのお力の大きさをいつまでも記憶に残したいと思います。会報第一号に掲載された本間会長の挨拶文には、「一高精神の良き伝統を継承し、二十一世紀に求められるリベラル・アーツの教育を駒場において発展させるためのサポーターとして、駒場友の会がゆるぎない存在感を備えるようになれば、もろもろの同窓会も包み込んだ新しい発想の組織が機能することになります」とあります。

駒場友の会の設立総会で挨拶する本間長世会長（2004 年 3 月 20 日）。本間先生は会長を 2 期 4 年務められ、そのあとを毛利秀雄先生に引き継がれました。

十年を経過した現在、終身会員および通常会員が約六〇〇名、一高および東京高校卒業生が三〇〇名、会友が三〇〇〇名の規模に発展し、その活動は、「新入生歓迎特別講演会」や「新入生ご父母と教養学部長との懇談会」の主催、ホームカミングデイの共催、駒場キャンパスで開催される音楽会の共催、駒場博物館展覧会の協賛など多岐に亘っています。

学生への支援活動では、教養学部で学ぶ外国人留学生の研修旅行、北京大学やハーバード大学の学生との交流活動、東日本大震災で被災した学生や被災地救援活動などについて補助を実施してきています。

また、駒場図書館に男女共同参画啓発のためのGENKI BOOKSを多数寄贈したほか、駒場キャンパス正門の修復（二〇〇八年）に際しての募金活動、自然教育の一部でもある樹木プレートや正門前の植栽プランターの寄付など、施設面での協力も行ってきました。

駒場友の会は、全国でも注目されている特色ある教養教育をさらに発展させ、駒場から有為な若人を世界に送り出すために活動してまいります。

この十年間に頂戴した多数の方々からのご支援に心から感謝を申し上げるとともに、今後とも幅広い連携を進め、総合文化研究科・教養学部と共に発展していくことを期しています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（駒場友の会理事、総合文化研究科・広域科学専攻教授、元教養学部長）

本の紹介

『はじめて考えるときのように』

文・野矢茂樹、絵・植田真

野矢さんは考えることが楽しいと言う。「哲学しかできませんから」と時々言う。考えるが楽しいってどういうこと？考えるってどうすること？。

はじめて考えたときはいつだったかと思い起こすと、親子喧嘩を本気でして、落ち込んだ時かもと思い出す。考えることはつらかった。つらかったから考えたのか？

哲学者というといつも眉間に皺をよせているというイメージだが、野矢さんはいつも穏やかだ。尖ったところなど一切ない（ように見える）。座禅を習いとしている。

二度目に考えたのはいつだっか？高校時代に女子の同級生にこう言われた。「山本君は私のこと好きなんでしょ。山本君にはどうしてそれがわかるの？説明して！」

自分の気持ちは自分にはわかるというのは当たり前とはいかない。「こころ」は謎です。この会話を解釈するに、この人は自分の心が確かめられなくて、不安になった。十六歳としては、それなりに切実だ。

野矢さんの言う哲学というのは論理式を並べることではなく、哲学者の名前を列挙することでもない。それは、自分が何気なくしていること、思い込んでいることに気づき、「なぜ？」をうまくつなげることだと説く。学べば誰にでもそれはできると。

そういう作法を習得すれば考えることは楽しくなるらしい。

野矢さんは、哲学には正解はないと言う。正解がないなら考えることに終わりはないことになる。「だから、いつまでも考え続ければよい。柔らかく、そして自由に」。

これが野矢ワールドの神髄だろう。もっと知りたい人は、装丁もイラストも素敵なこの本を先に読むか、四月十四日の講演会を先に聞くか。それは皆さんにお任せします。

（山本泰）

『はじめて考えるときのように』2004年刊、PHP文庫。Kindle版もあります。

新入生歓迎特別講演会のお知らせ

野矢茂樹先生が語る
「なぜ哲学が必要なのか」
四月十四日（月）午後六時二〇分から
会場：教養学部21KOMCEE
地下一階レクチャーホール
大学での学びについての楽しい講演です。新入生対象の講演会ですが、駒場友の会会員会友の参加も歓迎します。

駒場友の会第十一回総会のお知らせ

五月二四日（土）午後四時四五分から
会場：駒場コミュニケーションプラザ
北館二階多目的教室
選抜学生コンサートも同日に開催します。どうぞ奮ってご参加ください。
詳細は追ってご案内いたします。

穏やかな日差しの中でゆったりと
くつろぐことのできる
フランス料理
ルヴェ ソン ヴェール 駒場
駒場友の会の皆様がお食事の際に注文なさった
コーヒー・紅茶は、お支払いの際に会員証・会友証を
ご提示下さいますと無料になります。
営業時間　11：00～14：30、17：00～21：00
Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902
駒場ファカルティハウス内

駒場友の会会報　第22号
2014年3月15日発行
駒場友の会
会長　小林寛道
〒153-8902
目黒区駒場3-8-1 東京大学
駒場ファカルティハウス内
電話　03-3467-3536
FAX　03-3465-3334
メール
info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp
ホームページ
http://www.c.u-tokyo.ac.jp/ilovekomaba/
デザイン・印刷　株式会社双文社印刷
http://www.sobun-printing.co.jp